作物名：もも
病害虫名：縮葉病（病原：*Taphrina deformans*）

写真　もも葉の発病（葉が水膨れ状に変形している）

１　被害の特徴と診断のポイント

- 主に葉に発生するが、まれに、新梢や果実にも発生する。
- 展葉期以降に、新梢葉に淡赤～赤色の小さな水膨れ状の病斑が生じる。
- 徐々に葉の一部又は全体が厚く縮れ、病斑部は表面に白い粉が吹き出したような症状となる。
- さらに症状が進むと、発病葉は黒変腐敗して落葉する。

２　伝染源・伝染方法

- 被害葉上から分生胞子が飛散して、枝や芽の表面に付着して越冬する。
- 越冬期間は病斑を生じないため、外観的には異常は認められない。
- 春先の発芽期から展葉初期にかけて低温多雨条件が続くと、枝や芽の表面で越冬した分生胞子が発芽し、展葉初期の葉に感染する。
- 日中の気温が24℃を超える頃には本病原菌は繁殖しにくくなり、葉も抵抗力を増すため、発病はみられなくなる。

３　防除方法

- 被害葉は、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- 発芽直前に、本病に登録のある殺菌剤を散布する。発病後の薬剤防除は、十分な効果は期待できない。
- 収穫後の秋季における銅水和剤2回散布や、2月以降の休眠期における石灰硫黄合剤散布でも、防除効果が期待できる。なお、石灰硫黄合剤を12月～1月頃に散布すると枝の先端が枯死するような薬害が生じる場合があるため、この時期の散布は控える。

４　出典

(1) 参考文献

- 農業総覧原色病害虫診断防除編第6巻（農山漁村文化協会）
- インターネット版　防除ハンドブック　モモの病害虫（全国農村教育協会）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影

（令和7年8月作成）